巻き込まれたのは、女神

行見　八雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
巻き込まれたのは、女神

【Ｎコード】
Ｎ４８３２Ｖ

【作者名】
行見　八雲

【あらすじ】
ある国の神殿で、魔王討伐のための勇者召喚の儀式が行われた。そして、召喚によって異世界からやって来たのは、二人の人物。一人は、勇者である少年。そして、もう一人は黒髪の少女で――。というお話です。

巻き込まれたのは、女神（前編）（前書き）

同じ設定から派生したお話の一つです。
このお話はあまり巻き込まれた感が無いですが、巻き込まれ話も好きです。

巻き込まれたのは、女神（前編）

多くのレンガ造りの建物が立ち並ぶ都市の端、丘の上に佇む巨大な王城の隣に、真っ白な石で作られた王城に並ぶほどの壮大な建物があった。

この国の創造神である大神アセガ・ナルルとその子孫神を祀るその神殿は、天井近くに作られた窓から差し込むわずかな光が厳かな雰囲気を作り出し、正面の祭壇以外は何もない、開けたホール状になっていた。

そして、現在、そのホールの中央辺りには、巨大な魔法陣が描かれており、その魔方陣を十人ほどの白いマントを被った人々が囲っている。

また、魔法陣から離れた壁際には、上質な身なりの四十代ほどの男らしい顔つきの男と、彼を守るように周りに騎士達が控えていた。

魔法陣を囲む白いマントの者達がいっせいに呪文を唱え始めると、魔法陣の文字が金色に発光し出した。やがてその光は真っ直ぐ上へと立ち昇り、魔法陣全体が柱のように光を立ち上げ、その光が向こうも見通せないほど真白く濃密になっていく。

お経のように連綿と続けられる呪文を唱える声が、徐々により強く大きく静まり返った神殿内に響く。

そして、それを見守る者達も、固唾を飲んでその様子に見入っていた。

魔法陣から発せられた光の柱の周りを、バチバチと青色の雷が走

り、滔々と続けられる呪文の声ももはや叫んでいるかのような音量に達していた。そして、その場にいる者達の緊張感が限界を迎えようとした、その時。

急に光の柱がコーンという鐘のなるような音を立てて弾けた。

弾けた光の欠片が、目を焼く様な光を発し、その場にいた者は、手で目元を覆い、または目を閉じて光をやり過ごす。

やがて、光の奔流が収まった頃に、人々が魔法陣に目を凝らすと、そこには二つの人影があった。

一人は金に近い茶色の髪に、翠色の目の高校の学生服を着た少年だった。

魔法陣の敷かれた床に座り込んだ少年に、その場の人々の目が集中する。

状況が把握できず、呆然とする少年に、白いマントを被った老人がゆっくりと近づいていく。

「ようこそ、おいでくださいました。勇者様」

そう言って、恭しく胸元に手を置いて少年に頭を下げる。

「ゆ……勇者……？」

何とか状況を理解しようと、言葉を返した少年に、老人はにっこりと笑い「あなた様こそ、この世界をお救い下さる勇者様でございます」と丁寧な口調で答えた。

「現在、この世界は魔王率いる魔物達によって、脅威にさらされておる」

呆然と老人を見上げていた少年に、別の方向から声がかかった。
少年がそちらに顔をやると、上質な服装の、高貴な物腰で威圧感のある男――この国の王である――が、カツカツと少年のもとへ近づいてきていた。

「魔王の力は強大で、この世界には彼の者を止めることのできる力を有する者はおらぬ。しかし、このままでおれば、近いうちに世界は魔王によって滅ぼされるであろう」

真剣な顔で言葉を続ける王に、やがて少年の表情も緊張感のあるものへ変わっていく。

「そんな時に、神のお告げが下されたのだ。“異世界より来たる者、大いなる力を持ちて、魔の者を滅ぼすであろう”と。そこで、神官達を使い、そなたを呼び寄せたのだ」

そう言い切った王の言葉を、白いマントの老人、この国の神官長が引き継ぐ。

「突然のこと、さぞや驚きかとは思いますが、どうぞこの世界ガナルをお救い下さいませ」

そうして、神官長とその場にいた白いマントの者達全員にいっせいに頭を下げられ、少年はおたおたと慌てた。
しかし、少しの時間考え込んでから、やがてその緑色の瞳に強い意志を込め、しっかりと頷いた。

「分かりました。僕にその力があるのならば、出来る限りのことはします！」

少年の言葉に、その場にわっという歓声と、緊張が解かれた緩い空気が漂う。王も神官長も、ほっとしたような笑顔で少年に向き合った。

「……あの～……」

薄暗い神殿内に、明るい雰囲気が漂っている中、恐る恐るというように高めの声が割って入ってきた。

その声に気付いた、その場にいた人々全員が、声のした方を振り返る。

すると、召喚された少年の向こう、大きな魔法陣の端の方に、闇に融け込むようにひっそりと佇む、少年と同じ高校の制服の、真っ黒なストレートの髪を肩まで流した、濃い茶色の目の一人の少女がいた。

「……黒髪……」

その少女を見た、勇者の少年以外人々が、いっせいに顔を歪めた。その中の誰かが、ぽつりと厭わしげに言葉を漏らす。

「何者だ！　貴様！」

先ほどとは打って変わり、王が声を荒げながら誰何する。そんな王の後ろには、警戒心を顕わにした騎士達がいつの間にか移動してきていた。

「わ……私は、彼と同じ学校の者で、ただの巻き込まれた一般人です。えと、この件に全く関係のない私は、元の世界に帰してほしい

のですが……」

剣呑な雰囲気が漂う中、少女は控えめに、しかしはっきりと言葉を紡ぐ。

少女の言葉に、再び辺りがざわついた。「何故勇者以外の者が……！？」や、「ただ忍び込んだだけだろう」などと言った声が飛び交う。

「どういうことだ？」

「そんな……勇者以外が喚ばれるはずは……」

王が神妙な顔で神官長に問いかけると、神官長も戸惑いながらそう答える。

そんな中で、少女はどこか落ち着かなそうにそわそわしている。

「お願いします！　早く私を帰して下さい！」

「うるさい！　今貴様の処遇について検討中だ！　黙っていろ！」

威圧的にそう怒鳴った王に、しかし、少女は怯むことなく、焦燥感に満ちた声でしきりに懇願を繰り返した。

「お願いします！　早く元の世界に帰して！」

「ええい！　喧しいというに！　黒髪が厚かましくも！」

「早く！　でないとあいつが――――！！」

少女が必死の形相で、王に詰め寄ろうとしたとき、ズンと神殿の建物の上に何が重たいものが落ちてきたかのような重圧がかかり、建物がぐらりと縦に揺れた。
突然のことに、神殿内にいた人々が驚きながらも、その場に立っていることができず、尻餅を付いたり、しゃがみ込んだりしている。

「なっ！　何事だ！」

慌てたように王が叫ぶが、その場にいた誰もが、事態が分からずしきりに辺りを見回している。
ただ一人、その場に立ち尽くしていた少女だけが、顔を真っ青にして全身を震わせていた。

一瞬落ちた不気味な静寂の後、ゴウンと重々しげな音を立てて、神殿の入り口の観音開きになっている重厚な扉が、ゆっくりと両側に開け広げられていく。

「馬鹿な……！　扉には鍵がかかっていたはず……！」

神官長が信じられないというふうに呟いた。
今日は勇者召喚という重要な儀式を行うため、関係の無い者が神殿内に立ち入ることができないよう、神殿の扉は厳重に施錠されていたのだ。
その扉が、まるで鍵などかかっていなかったかのように、容易く開いていく。しかも、金属製の重厚な扉であるにも関わらず、重さなど関係の無いように軽やかに。
そうして、開かれた扉の間から、真っ白な光が差し込んでくる。
締め切られ薄暗かった神殿内の床に、白い光の線が伸びる。やが

てそれは、太く長く伸び、その光の真ん中に一つの影を映し出した。
誰もが、音一つ立てられないような緊張感の中で、光を背に佇む、今は逆光のせいで影にしか見えない闖入者を見つめていた。
扉が両側に開き切った頃、その影はゆったりと、神殿内へと足を踏み入れた。
まるで王者の道を歩くように、ゆっくりと堂々とした態で、影は神殿の中央へと歩み寄る。
正体不明の影が近寄って来るのを、その場にいた誰もが床に座り込んだまま、身動きすらせずにただ注視しているだけだった。いや、誰も動くことも声も発することもできないでいたのだ。言いようのない威圧感が、その影から発せられていたために。まるで見えない壁で全身を押し付けられているようだった。
しかし、勇者と共に喚ばれた異世界の少女だけは、驚愕の表情で息を潜めてその影を見つめていた。
マントのような衣装を揺らしながら、影が漸く人々の視認できる距離へとやってくる。
影の中から浮かび上がったかのように、姿を顕わにしたその人物に、誰もが目を瞠りひゅっと声を飲んだ。
神官の中には、がたがたと体を震わせる者までいる。
さらりと流れた、耳にかかるほどの長さの金色の髪は、光を集めたかのように神々しく。すっと辺りを見回した瞳も、太陽を写し取ったように輝かしく、理知的な彩に満ちていた。顔は小さく若々しさに溢れていて、精悍な顔立ちに甘さを含んだ、男女問わず見惚れるほどの美しさだ。
また、身長は高く、その体は、雄々しくバランスのいい筋肉が綺

麗についていて、才能に満ちた彫刻家が丹精を込めて作り出したかのようだった。
身に纏う服は清浄なまでに真っ白で、そこここに人の手とは思えないような精密な刺繍が施され、一目で最上級と分かる宝石が程よく散りばめられた、精巧な作りの装飾品を身に着けている。
全身から漂う気配は人間のそれではなく、立っているだけで感じる神聖さと凛麗とした静謐さは、傍へ寄るだけで罪深き存在になるように思えた。

それは、この世界にいる者であれば、誰もが知る存在であった。国の歴史書で、絵画で、神殿で、必ず一度はその姿を目にすることがあり、また、彼に関する話ならば、数多くのものが大人から子どもにまで広く語り継がれている。

「――――ま……さか、……闘神ライセム・ゾンテ……！？」

誰かが、詰まった喉から絞り出すように、そう呟いた。

そう、彼こそは、この世界の創造神アセガ・ナルルの孫神の一人であり、その中でも創造神に次ぐ力を持つと言われている、戦を司る男神ライセム・ゾンテ。闘神である彼の加護を受ければ、戦争であろうと魔物の討伐であろうと、決して負けることはなく、特に国同士の勢力争いや、魔物の害の多いこの世界では、最も有名で重宝されている神でもある。

そんな彼が何故ここに現れたのか、まさか勇者に加護を与えに来たのかと、戸惑いと共に人々が期待を膨らませていた、のだが。

闘神ライセムが一点で目を止め、その神々しいまでに端正な顔を、かつて見たことが無いほど満面の笑みに変えた。

巻き込まれたのは、女神（後編）

「やっぱり、姉さんだーーーー！！！」

「ぎゃあああぁぁぁぁ！！！」

神殿の中に、非常にテンションの高い喜色に満ちた声と、次いで断末魔のような悲鳴が上がった。

なんと、ライセムが現れてから、人々の目を盗んでそっと逃げようとしていた黒髪の少女に、ライセムが全力で抱き着いたのだ。

一介の細身の女子高生が、マッチョまではいかない細マッチョの男に抱き着かれ、がっつりと逞しい腕でその身をホールドされていた。

「ああ……本当に姉さんだ！　やっと帰って来たんだね！　もう二度と離さないよ、姉さん！　姉さん、姉さん、姉さん……」

「ぎゃあああぁぁぁぁ！　うざい！　うっとおしい！　息が荒くて気持ち悪いいいいぃぃ！！」

ぐりぐりと顔と体を押し付けてくる男に、黒髪の少女は必死に手を突っ張って逃れようとするも、離れるどころか余計に抱き締める腕の力が強くなる。

その、伝承やごく稀に神殿に現れるときとは、全くかけ離れた姿に、その場の人々は、ぽかーんと呆気にとられた表情で二人を凝視

している。神官の中には、顎を外しそうなほど大口を開けている者までいた。

「姉さん、会いたかったよ、姉さん！　まさか本当に姉さんが引っかかるなんて、夢のようだよ！」

髪に鼻先を埋めながら、呟かれた言葉に、少女はぴたりと抵抗を止め、ぎぎぎとライセムの方に顔を向けた。

「……ちょっと！　私が引っかかったって、どういうこと！？」

眦を吊り上げて怒鳴った少女に、周りの者達が息を飲んで、体を強張らせた。あの、闘神になんて口を……と、怯えの篭った目で少女を見ている。

闘神ライセム・ゾンテは、神でありながらその無慈悲なまでの残虐さと、他者への無関心さで有名な神でもあった。自らに刃向う者には容赦なく打ち滅ぼし、また一度加護を与えたものであっても、気分次第ですぐに見捨ててしまうような、気紛れな面が多かった。

そのため、ライセム・ゾンテの加護を得ようとする者は、極力彼の怒りに触れぬよう、そして、供物等あらゆる手を尽くして、彼の関心を引き続けることに必死であった。しかし、彼が供物に興味を示すようなことは一度もなく、彼の加護を得られ続けるか否かは、まさに神のみぞ知るというのが、現状であるのだが。

そんな彼であるから、少女の暴言に、誰もが少女の命はこの場で失われるだろうと、目の前で行われる惨劇を覚悟していたのだが。

周囲の緊張を孕んだ沈黙を全く意に介することなく、ライセムはただ少女を見つめたまま、うっすらとその白磁の頬を赤く染め、にっこりと邪気のない顔で笑んだ。

「いや～、今回の魔王の進撃に対して、人間達が太古の文献を持ち出して、異世界から勇者召喚をするなんて言ってたから、異世界に逃げた姉さんも引っかからないかなぁと思って、召喚を勧めるのと合わせて、魔法陣に姉さんの情報を描き加えておいたんだよね。でも、まさか本当に、姉さんが喚ばれるとは思わなかったよ」

そう、あっけらかんと言い放った後、途端に目を細め、口元に歪んだ笑みを浮かべながら、「俺は、じいさんとその他のやつらによって、姉さんを追いかけられなくさせられたからね」と続けた。

その言葉に含まれた憎悪のような感情に、少女はひくりと口元を引きつらせ、他の者はびくりとさらに体を縮こまらせた。

しかし、すぐに少女ははっと何かを思い出したように、その顔を怒りの表情に変え。

「あ！　そうよ！　その魔王とか、魔物とかっていったいどういうことよ！」

キッとライセムを睨みあげる少女に、ライセムは再びうっとりとした眼差しで少女を見つめた。

「一万年くらい前に、姉さんが異世界に行っちゃってから、ずっと寂しくて寂しくて姉さんが恋しくて鬱々してたら、気が付いたら世界が魔物だらけになってたんだよね」

何か悪い気が出てたみたい。そう、ちっとも悪びれない言いぐさ

で話すライセムに、少女はぐっと彼の胸元を掴んだ。
その少女の突然の暴挙に、他の人々がひいいいいいぃぃぃ！！　と、場の雰囲気から口には出せないでいたが、心の中で絶叫していた。
「やっぱり、お前かあぁぁぁ！！　おかしいと思ったのよ！　私がこの世界を去るまでは、魔物なんていなかったもの！　どうしてくれんのよ！　私が丹精込めて育て上げてきた世界をおおぉぉぉ！！」
胸ぐらを掴んだまま前後にゆっさゆっさと揺する――しかし、体格差のせいであまり揺れてはいない――少女に、相変わらずライセムはにっこりと甘い笑みを浮かべたまま。
「でも、それは姉さんが俺を置いて異世界へ逃げたせいじゃない」
その、顔は微笑んでいるのに、目の奥に宿る暗い怒りを見た少女は、うっと言葉を詰まらせて、動きを止めた。
けれど、負けじと全身を怒らせながら、彼の目を見返し。
「それだって、あんたのせいでしょう！　毎日毎日、時所構わずセクハラしてきたり、あまつさえ、お……押し倒して……！」
「え？　だって、俺姉さんのこと好きだし愛してるし俺のものにしたいし、別に問題無いでしょ？」
「問題大有りよっ！！　いい！？　あんたと私は、同じ父神様と母神様から産まれた、れっきとした姉弟なのよ！　姉弟！！」
顔を赤くして怒鳴る少女に、ライセムは呆れたようにやれやれと首を振って。

「姉さんこそ何言ってんの？　近親婚がタブーだなんて、人間が勝手に決めたことでしょ？　俺たち神族の間では、近親婚なんて当たり前だし、じいさんと孫とか、親と子で子ども作ってるやつらだって、たくさんいるじゃない」

そんなライセムの言葉に、少女はぐっと押されつつも、

「私が嫌なのよ！　姉弟で結婚なんて、考えられないの！」

と、はっきりと言い放った。

そんな二人の会話に、すっかり置いて行かれつつも、その場にいた人々の中でざわざわと囁きが広がっていく。

「闘神ライセム・ゾンテと父神母神を同じくする、姉？」

「一万年前に消えた……」

「まさかあの方は……」

信じられないと、二人に目線を向けたまま、それぞれが思いを口にする。

「――――遥か昔に姿を隠した、愛と豊穣の女神……シアナテ・ジーア……！？」

神官長がその名を口にした瞬間、ライセムと少女が、同時に神官長の方に顔を向け。

「その肩書きを言わないで！」

「軽々しく姉さんの名を口にするな！」

少女は顔を赤くして涙目でそう訴えただけだったが、ライセムが不快げに声を発した瞬間、ずんと人間達にかかる威圧感が増した。

「ぐっ！」「がはっ！」というめき声をあげながら、人々が地面へと這いつくばる。あまりのプレッシャーに、数名が気を失い倒れていく。

「あ！　こら、ラス！　神力を押さえなさい！」

そんな人々の様子に慌てた少女――神名シアナテ・ジーア――が、ライセムを窘める。

そして、少女の声にぴくりと体を揺らせたライセムは、きらきらと輝く様な笑顔で少女の方を振り返り。

「また姉さんがそう俺を呼んでくれるなんて！　ああ、もう、姉さん！　俺だけの姉さん！　愛してる愛してる愛してるよ！」

ぎゅうぎゅうと少女を抱き締めながら、ひたすら愛の言葉を囁いている。気が逸れたせいか、ライセムの発するプレッシャーも幾分か収まったようだ。

「邪魔なじいさんや他のやつらもいないし、これからべったりと愛を育んで行こうね！　子どもは何人にしようか？　あ、でもしばらくは姉さんと二人っきりが良いなぁ」

そう、うっとりと少女の艶やかな黒髪に頬を寄せながら囁いていたライセムに、ん？　と少女は眉間に皺を寄せた。

「え？　おじい様達がいないって、どういうことよ？」

ぐぐぐとライセムの体を押し返しながら、少女が問いかけると、ライセムはニコニコと無邪気な笑みを浮かべながら。

「俺と姉さんの仲を邪魔する奴らが邪魔だったからね。こことは別の世界に追い出したんだよ」

「は？　追い出したって……おじい様も？」

相手は創造神である。いくらライセムが、創造神アセガ・ナルルに次ぐ力の持ち主とはいえ、祖父には敵わないだろうと思っていたのだが。

「やっぱり、いくら創造神とはいえじいさんも歳だよね。俺の姉さんへの愛の前には敵わなかったみたいだよ」

くすくす笑いながら言われた言葉に、さすがに少女も固まった。

一万年ほど前、ついに本気で貞操の危機を感じた少女――女神シアナテが、祖父神に泣きつき、シアナテを哀れに思った祖父神と、シアナテをライセムに渡したくなかった男神達によって、異世界へと飛んだシアナテを追おうとするライセムを、彼女のいる世界へと飛べないようにしてもらっていたのだ。

さすがに祖父神の力には敵わなかったライセムは、しぶしぶこの世界に留まるしかなかったのだが。

それが、今や祖父神の力を凌駕するようになったということは、もはや彼を止められる者は誰もいないということで……！

徐々に青くなっていく少女の頬を、指の背で撫でながら、ライセムは蕩けるような甘く暗い笑みを刷き。

「これで、俺達の邪魔をする者はいなくなったから、覚悟してね、姉さん……」

耳元で囁かれた言葉に、少女はぶるりと背中を震わせた。

「え！　ちょっ！」

突然ふわりと担ぎ上げられて、少女は声を上げた。気が付けば、ライセムの腕に腰かけるような恰好で、抱き上げられていて、少女は慌てて下りようともがく。

しかし、背中に回されたもう一方の腕にしっかりと体を固定されており、体を捻ってみたところでこの拘束から逃れられそうにはなかった。

「さあ、姉さん。天界に二人だけの新居を用意してあるから、そこで存分に可愛がってあげるからね！」

鼻歌でも歌いそうなほどの上機嫌で、ライセムは入口の方へと歩き出す。

「きいゃあああぁぁぁ！！　襲われるぅぅぅ！！　誰かああぁぁぁ！！」

そんなライセムの逞しい背中をばしばしと叩きながら、少女が必死に叫ぶが、その場にいた人々はぐったりと床に寝そべったままで、

二人の方へ辛うじて顔を上げ、成り行きを見守っているだけだった。
涙と絶望に染まった少女の目が、訳も分からずぱちぱちと目を瞬かせている、勇者を捕えた。
「ちょっと！　あなた勇者でしょ！　このセクハラ魔王を倒してよ！」
そう必死に叫ぶも、勇者は未だ呆然と床に座り込んだまま、動けずにいた。
「姉さんが、俺以外に助けを求めるなんて……ああ、俺そいつ消してしまうかも」
顔は出入り口に向けられたまま、愉快そうな声色でそう言ったライセムに、少女は、以前よりも病み度が上がっている！　と危機感に顔をひきつらせた。
マジでやばいと、手足をばたつかせたり、体を捻ったりしてみるものの、ライセムはじゃれている猫でも相手にしているかのように、余裕かつ微笑ましげだ。
「だ、だ、だれかあああああぁぁぁぁぁぁ！！！」
その日、神殿から空へと昇っていく悲鳴が、国中へと響き渡ったとか。

巻き込まれたのは、女神（後編）（後書き）

主人公の性格が似たような話ばかりですみませんm（＿；）m
同じ設定からの派生小話ということで、目をつむって頂けると助かります。

始まりは、あなた――ライセム視点

あなたの全ては俺のもの。
それはもう、俺がこの世界に生まれ落ちた瞬間から決まってたんだよ。
だからね、姉さん。あなたがどれほど嫌がろうが、どこへ逃げようが、俺は決してあなたを離さないよ。

母神の胎に宿っているときから、俺の力は異質だった。
もともと神族とはそういうものなのか、それとも俺が特別だったのかは分からないが、母神の胎内にありながら、俺は神々の治め、存在するこの世界に関する知識を有していた。さらに、はっきりとした意識を持ち、胎外の音を聞き取ることができた。

そんな状況で、外の声を聴く限り、やはり母神の胎内にあっても、俺の力の桁違いの強大さ、それが創造神である祖父神に次ぐ規模であることは、外のやつらにも分かっているらしい。
だから、神族のやつらの中には、俺の力が祖父神を脅かし、現在の神族間の秩序を乱しかねないとして、生まれる前に俺を消滅させてしまうべきだと主張する者も多くいた。まあ、そのうちの半分くらいは、俺の能力を面白く思わないだけのようだったが。
神族だからといって、全てのやつらが清廉潔白に生きているわけではない。腐りきったやつらだっていくらでもいる。母神の胎内で、俺はそんなやつらにうんざりしていた。

そんな周囲の態度に、父神と母神は困っていたようだったが、俺は別にこのまま消滅してしまっても構わないと思っていた。
この世界の成り立ちや外の様子、果てはこのまま行った先の未来の状況まで、すでに知ってしまっていたから、ここで生まれ落ちたとしても、何も面白いことは無いだろうと考えていたからだ。
他の神族のやつらのように、生き物の存在する世界を創り上げて育てていく、なんてことにも特に興味は沸かなかったし、退屈なまま気の遠くなるような時間を怠惰に過ごしていくぐらいなら、面倒事を背負ってまで生まれる必要などないだろう。

生きることを望まない俺の意識と呼応するように、俺の生命力は徐々に弱まっていき、それに焦る父母神や逆に喜ぶやつらの気配が伝わってきたが、それにも特に心が動かされることはなかった。
すうっと暗闇の中に還るように、俺という存在が消えていく、その過程をただ他人事のように感じながら、消滅するのを待っていた、ある日。

――――げんきに、うまれておいで。
――――おねえちゃんが、いろいろおしえてあげるね。
――――ふふ、すごくたのしみ。

今の俺の状況を知らないのか、そう母神の胎内の俺に語りかけてくる声があった。
舌足らずに話す、生命力に溢れた元気な声。
けれど、澄んだ鈴音のような、柔らかく優しい声。

その声を聴いた瞬間、俺は今までのやつらには感じたことの無いような、感情の高ぶりを感じた。

この声の主は誰なのだろう。どんな子なんだろう。

そして、その子は俺の何なのだろう。

体の中に一気に湧き上がった好奇心に釣られて、俺は消えかかっていた力を最大に発揮して、外の様子を必死に探った。

そうして、外を見ることまでは出来なかったが、聞き取ったやつらの声や、読み取った思考から分かったことは。

彼女は俺と同じ父神と母神から生まれた姉であり、愛と豊穣の女神としての役割を持っていること。

そして、その容姿は輝かしいほどに可愛らしく、将来は神族の中でも並ぶ者のないほど美しくなると言われており、そんな彼女を今から狙っている者も多いということだった。

俺以外の誰かが彼女を手に入れる。そんなこと許せるはずがない。

彼女は俺の唯一の姉だろう？　だったら、彼女は俺のものだ。他のやつらが触れることも、見ることだって許せるはずがない。

ああ、早く生まれなければ。

姉さん、俺の姉さん。

いったいどんな姿なんだろう。どんな顔であの可愛らしい声を発していたのだろう。

母の胎越しにも伝わる、綺麗で優しい気配。傍にあればどれほど心地よいのだろう。

知りたい、知りたい、そして、触れたい。

俺の思考はすでに姉さんのことでいっぱいで、いきなり力を盛り返した俺に、驚く外のやつらの様子も全く意識に入ってこなかった。

真っ白な光が俺の目を焼く。

だが、そんなことに構わず、俺は必死に目を開けた。
神族ゆえの身体能力で、生まれ落ちてすぐ俺の体は思うように動いた。

寝かされた柔らかなベッドの上で、目を、持ちうる全ての力を使って、懸命に周囲を探る。
傍にあるのは間違いなく姉さんの力の気配。柔らかで清らかな、恋しい気配。

そんな俺を嬉しそうに覗き込んできたのは――――。

ああ、ほら、見つけた。

ねえ、俺はあなたのために生まれてきたんだよ。
あなたが、消えようとしていた俺を生かしたんだ。
だからね、姉さん、責任とってずっと俺の傍にいなよ。俺を退屈させないように。俺が俺自身と共に、つまらない世界を破壊したくならないように。

ねえ、愛しい愛しい可愛い姉さん。いつだって、あなただけが俺を生かすんだ。

始まりは、あなた――ライセム視点（後書き）

やはり、ここまで書いておきたかったので……；
つまりは、筋金入りということです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4832v/

巻き込まれたのは、女神

2011年8月20日22時10分発行